

令和6年度次世代の学校・教育現場を見据えた
先端技術・教育データの利活用推進事業
成果報告書

個別最適な学びの実現に向けた AOS MylogとAOS Dashboardの 導入実証

実施事業者:株式会社 SPACE

2024年1月



教育現場の課題

データ等に基づく多様な生徒の理解を 指導の個別化に活かすことの困難さ

「個別最適な学び」を実現するためには、生徒が自身の特性を把握し、最適な学習方法を選択する「学習の個性化」と、教員が生徒の多様な特性に応じて指導を調整する「指導の個別化」が必要である。令和5年度までの実証では、主に生徒がアセスメントから得られる「**個才***」データから得意な学習方法を活用して自分らしく学ぶ機会を提供する取り組みを進めてきた。一方で、教員が学級内の多様な「個才」データから個々の状態を把握し、個別支援や指導を行うことは依然困難を極めている。学級内の「個才」データの集計・分析が可能な教師向けダッシュボードを導入し、「指導の個別化」を促進させる必要があるのではないか。

課題解決の方法

ダッシュボードを活用した個人・集団の特性把握による 個別最適な学びの実現

生徒が主体的に学ぶためには自己理解とリフレクションの機会が重要である。本事業では、生徒が自身のデータを可視化し自己分析を行う「**AOS Mylog**」と、教師が生徒個々や集団の特性を把握・分析する「**AOS Dashboard**」を導入することで、学習の個性化と指導の個別化を支援する。多様な生徒の興味関心や特性、学習スタイルを一目で把握できる「AOS Dashboard」により、教師は生徒一人ひとりの学習状況や特性の理解を促進し、その傾向に合わせた適切な支援や指導法を提供しやすくすると考える。これにより、生徒一人ひとりの特性に応じた支援や協働学習の機会を創出し、全国の学校で「個別最適な学び」の実現を目指す。



*自分の特性。興味関心領域、思考スタイルの指向性、認知特性の指向性等。

『個別最適な学びの実現に向けた AOS MylogとAOS Dashboardの導入実証』

for student



- ①アセスメントおよびAOS Mylogによる特性のフィードバック
- ②自分子講座による個別理解の促進

for teacher



- ①AOS Dashboardによる「個才」の把握
- ②個才理解に基づく支援、授業作りに関する研修

実証校

■鎌倉市立深沢中学校

- 1学年: 150人
- 2学年: 160人(アセスメントのみ)
- 教員: 8名

■鎌倉市立岩瀬中学校

- 1学年: 160人
- 2学年: 160人(アセスメントのみ)
- 教員: 8名

実証スケジュール

~8月

開発

7月~11月

実証

12月~1月

効果検証

2. 実施内容(教員研修)

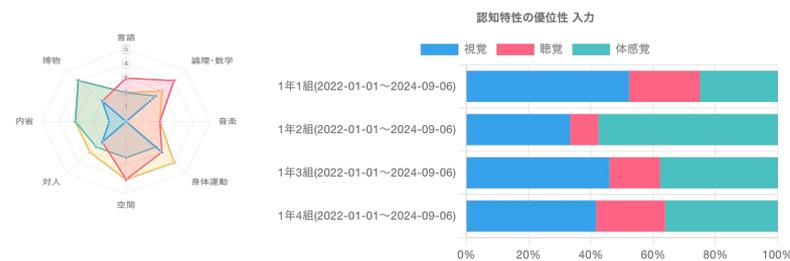
①導入研修 アセスメントによる個才理解

認知特性や興味関心領域を把握するアセスメントから読み取る、個々の才能や自分の学び方のクセの把握、及びそれに合わせた環境づくりについての研修を実施。生徒が自己理解を深め、学びを自己調整できるような環境設定や評価のあり方について考える機会とした。



②指導の個別化に活かす AOS Dashboard活用研修

AOS Dashboardのハンズオン研修とともに、ダッシュボードを活用し特性に応じた指導・支援のバリエーションについてディスカッションを行うなど、ワークショップ形式での研修を実施した。個才の理解が実際の指導や教室の環境設定にリンクさせるための研修と位置付けた。



特定のグループごとのデータを集約し、グループ間比較を可視化

2. 実施内容(生徒への授業)



SpaceQ 2021/10/28

8つの力

STEAM

認知特性の優位性

学習スタイル

II SPACE

① マイメモリアード

Q1 はじめての記憶は、何歳の時のどんな記憶ですか？

Q2 一番楽しかった記憶はなんですか？

Q3 一番楽しかった記憶は、何歳の時のどんな記憶ですか？

② ライフログ

1 元気が出る時には、どんな共通点があるかな？

⑥ ビジョンカラーズ

地球の上のみんなの家

Mylog 2024/08/14

表示データ切替 ティートコピー

2024年08月14日のSpaceQ 2024年08月13日のSpaceQ

言語 論理・数学 音楽 身体運動 空間 対人 内省

アセスメントにより「個才」を把握
 学び方のクセを知ることによる
 学習の個性化

自法学により価値観や興味関心を見つめてさら
 に「自己理解」を深める

Mylogにより自己の変化を見つめ
 振り返る

アセスメントの実施



過去

現在

未来

マイメモリーカード

①マイメモリーカード

Q1 はじめての記憶は、何歳の時のどんな記憶ですか？

2歳から3歳の頃、幼稚園時代のグループ活動の時、夏休みに家族で水遊びに行ったこと。

Q2 一番楽しかった記憶はなんですか？

小学校5年生の時家族旅行で、京都観光に行った、お祭りに参加したこと。

Q3 一番悲しかった記憶はなんですか？

高校1年生の時お父さんが病気で亡くなったこと。

Q4 一番大切な記憶はなんですか？

小学校6年生の時お母さんが病気で亡くなったこと。

©2022 SPACE, Inc.

ダイアリー

新しいダイアリーを書く

画像をアップロードする

タイトル

日時

場所

内容

ここは、私の思い出がある場所です。私は小さい頃からよく遊び、思い出をたくさん残しています。この場所は特別な場所であり、いつかまた訪れたい場所でもあります。自然の中は心が癒やされ、気分がよくなります。大切な思い出をここに書き残したいです。思い出を大切にしたいです。

ダイアリーも保存する

感情ドロ잉

④感情ドロ잉

気持ちが上がっている時の感情

気持ちが下がっている時の感情

©2022 SPACE, Inc. 新着!

ビジョンコラージュ

⑤ビジョンコラージュ

未来の自分が大切にしたいもの

地球の上のみんなの家

©2022 SPACE, Inc.

ライフログ

②ライフログ

©2022 SPACE, Inc.

マインドマップ

⑤マインドマップ

作成例

©2022 SPACE, Inc.

3. 活用した先端技術(アセスメントと先端技術の導入イメージ)

① 1人1台端末にて、Googleアカウントでアセスメント専用サイトログイン



② Googleフォームにてアセスメントを実施



本実証で導入したAOSについて

AOSとは...

Assessment Operation Systemの頭文字をとったもので、Google Workspace for Educationと連携して、Googleアカウント認証でユーザーを特定し、GoogleフォームやGoogleスライド等で取得したデータをユーザーに紐づけて蓄積・集計・表示できる機能を有するシステム

AOS

③ AOSと連携してユーザー情報に紐づいた情報として、アセスメントの回答を集計し、フィードバックシートを作成

Google Workspace for Education

Google認証

Googleフォームからアセスメントの回答を入力

Google Cloud Platform



クラウドサービス経由で独自のアルゴリズムで集計

マイページにログを蓄積し、フィードバックを随時確認



マイページからアセスメントを実施し、クラウド上で処理

ユーザー情報との紐付け・集計処理

3. 活用した先端技術 (AOS Dashboardの操作イメージ)

① 比較したいデータを設定



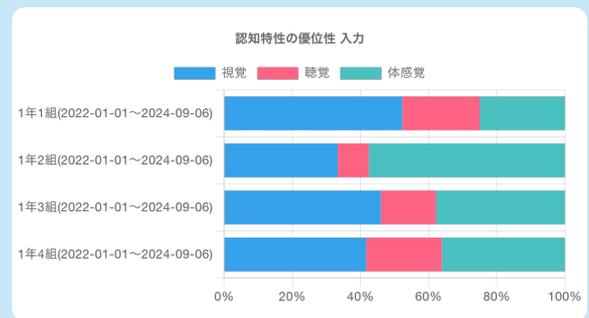
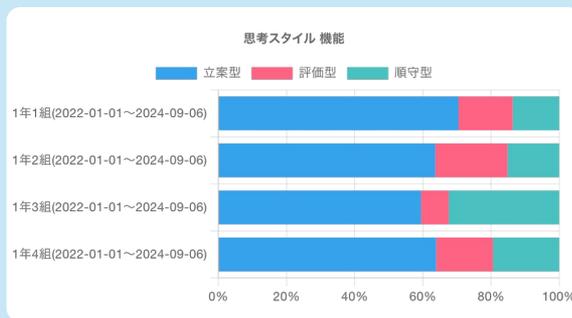
② 追加したいデータを選択



③ 表示したいデータを選択



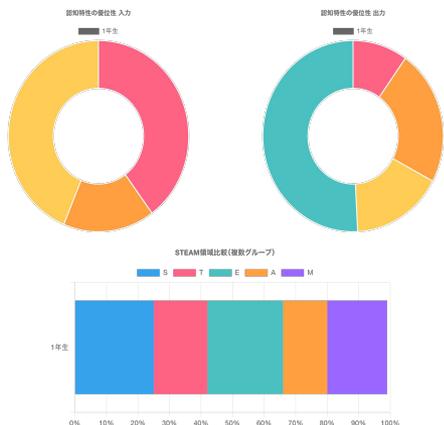
④ 表示したいデータを 集計し、可視化



3. 活用した先端技術 (AOS Dashboardでできること)

集団の特性傾向の把握

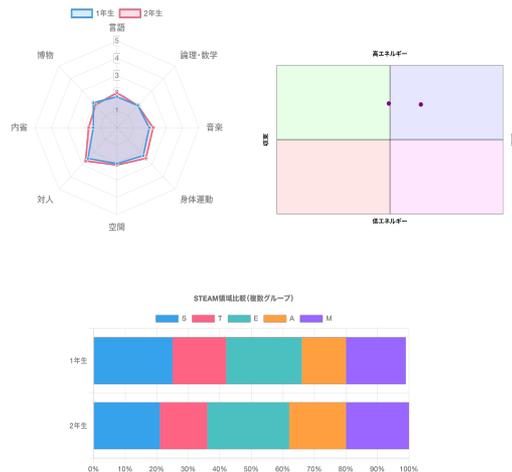
- クラス毎に集計結果を表示させることができる。
- 特定のグループを作成して、その集団の集計結果を確認できる(生活班、部活、行事のグループ分けなど)



集団間／個人間の傾向の比較

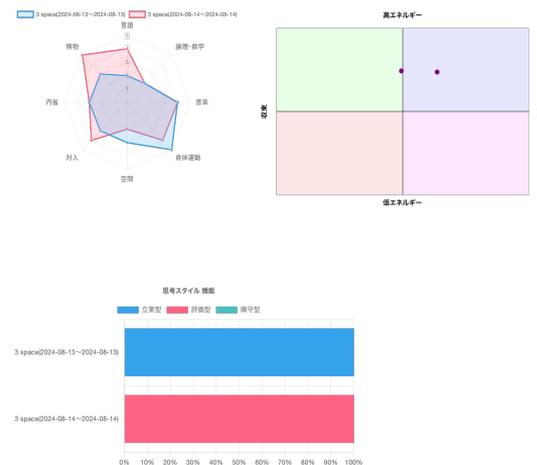
- 1組と2組を比較する。
- AさんとBさんを比較する。

※現状、比較できる集団(個人)数は4つまで



個人／集団の Before・After比較

- クラスの1学期と2学期の結果を比較する。
- Cさんの、9月と12月を比較する。



3. 活用した先端技術 (AOS Mylogのイメージ)

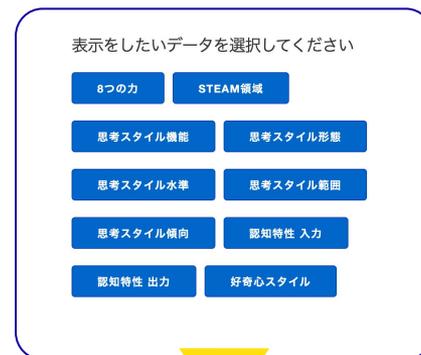
① 比較したいデータを設定



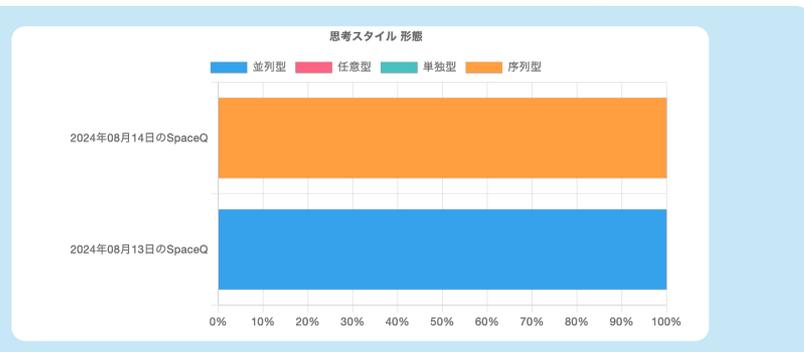
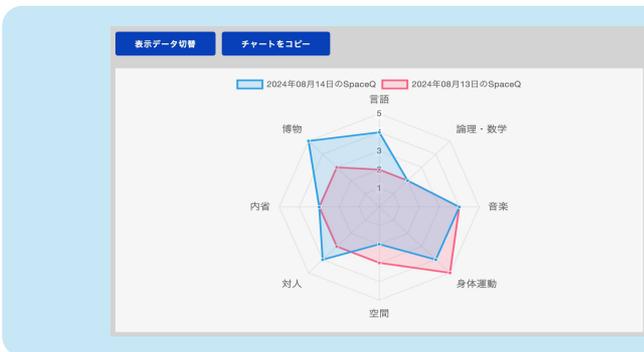
② 追加したいデータを選択



③ 表示したいデータを選択



④ 表示したいデータを集計し、可視化



4. 成果報告(教員研修)

1回目の研修でアセスメントの内容や意図について理解を深めた後、2回目の研修ではDashboardを活用しクラスの傾向を分析しその対応について考えるワークを行った。

①導入研修 アセスメントによる個才理解

②指導の個別化に活かす AOS Dashboard活用研修



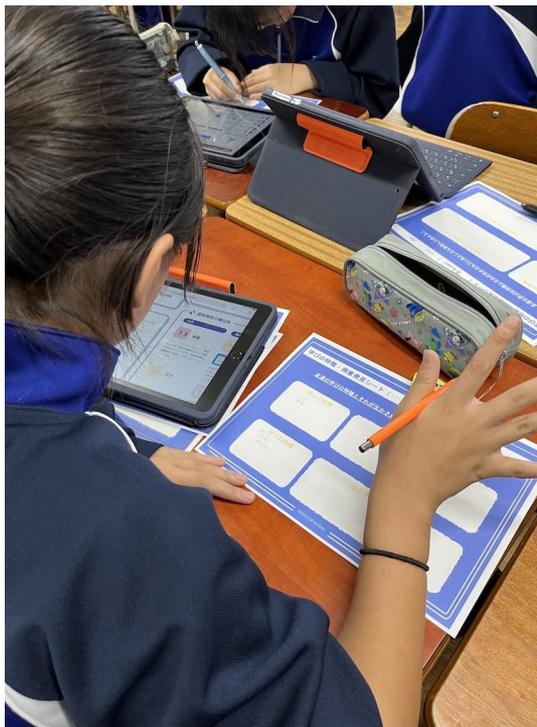
項目	クラスの傾向	工夫してみたいこと
8つの力	空間認知、身体運動、対人が高い	実験などを多く協働する授業にしたい
STEAM領域	エンジニアリングが高い	PBLでものづくりを行うようなワークを行いたい。
思考スタイル	立案型の生徒が多い、単独型	自分たちで実験計画を立てるような形を取りたい 一つの課題にしっかり取り組む
認知特性(入力)	体感覚優位	とにかくやってみる やらせてみる
認知特性(出力)	話すが多い	話してリフレクションをさせたい
好奇心スタイル	高エネルギー 収束、拡散の差は少ない	チャレンジする機会を多く取る

教員研修のワークシート(記入された様子)

4. 成果報告(自分学)

アセスメントによる客観視と合わせて、主観的に自己理解を深めていくプロセスとして自分学講座を実施した。

自分の力を発揮するために
自分らしい「学び方」を
一緒に見つけましょう



4. 成果報告(効果測定の方法)

生徒へのアンケート概要

方法

実証前後のアンケートを実施

時期

- 2024年7月～2024年11月

対象

実証前アンケートと実証後アンケートの両方を回答している生徒を調査対象とする

- 岩瀬中(中学1年137人、中学2年127人)
- 深沢中(中学1年123人、中学2年116人)

内容

- ①「個才」の把握による自己理解の変化
- ②自己肯定感の変化
- ③AOS Mylogの効果

分析方法

- アンケート回答からの量的分析および質的分析

教員へのアンケート概要

方法

実証前後にアンケート調査を実施

時期

- 2024年7月～2024年11月

対象

自分学に関わった中1～中2の教員

- 岩瀬中9名
- 深沢中8名

内容

- ①生徒理解の変化
- ②指導観の変化
- ③AOS Dashboardの効果

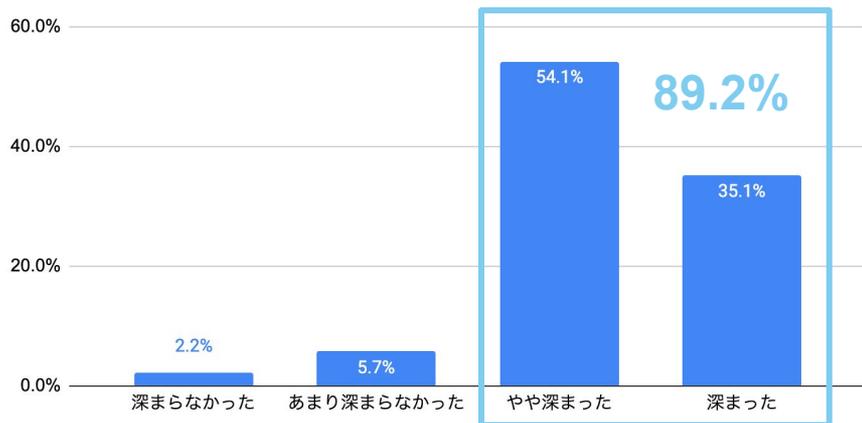
分析方法

- アンケート回答からの量的分析および質的分析

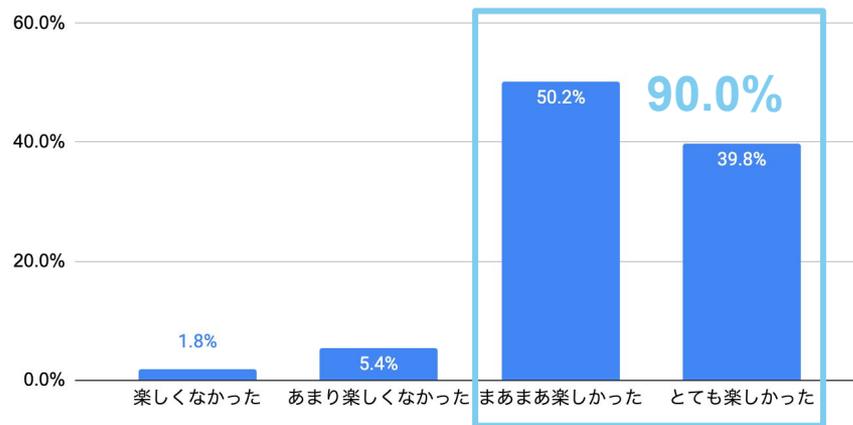


4. 成果報告(生徒の自分学に関する感想)

自分学を受けた感想



『自分学』を受けたことで、自分自身がどのような人であるかという理解が深まりましたか？



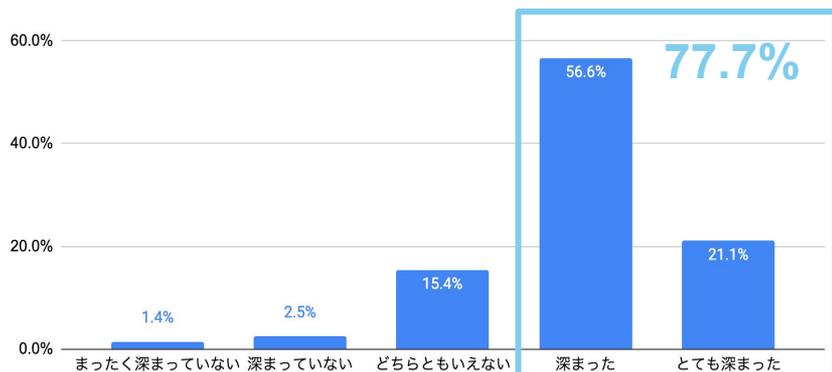
『自分学』の中で、自分をj知ることは楽しかったですか？

【自分学を受けた生徒の感想】

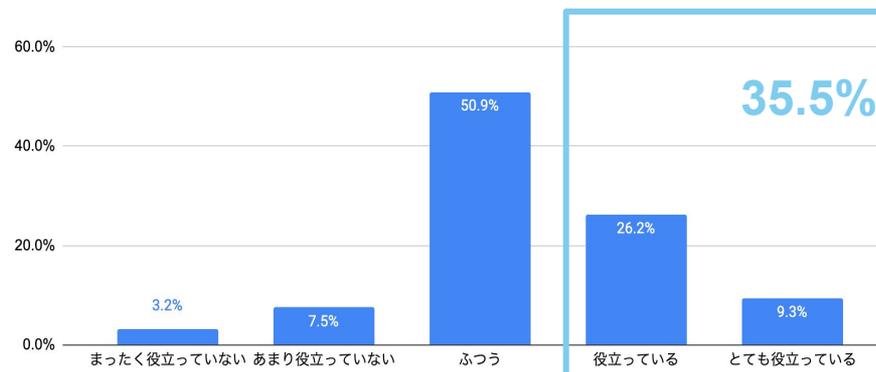
- 受ける前は、自分の長所とか何が得意かわからなかったけど、これやって自分には長所があるんだなと変わった。
- 自分では自覚していなかったが熱心に取り組んでいたことがあったり頑張っていたことがあること
- じぶんが色々なことに興味を持ったことに気づいた受ける前はそんなことはありませんでした
- 受ける前は自分の本音がわからなかったが受けた後はわかるようになった
- 受ける前は自分は苦手な事が多いと思っていたけど、実は得意な事が思っていたよりあって驚きました。

4. 成果報告 (AOS Mylogの効果について:生徒)

成果指標: 自己理解度	77.7%	達成
成果指標: Mylog効果度	35.5%	未達成



Mylogを使うことで自分の得意なことや自分の考えなど自分への理解が深まったと思いますか？

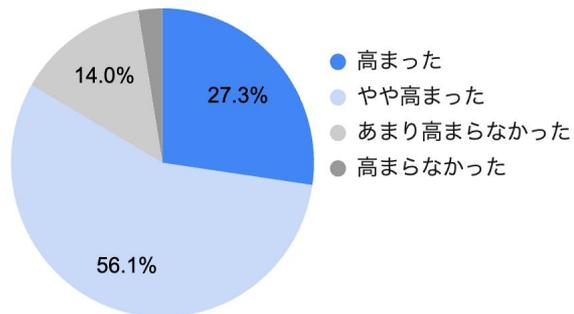


Mylogの結果は、現在あなたの勉強や生活に役立っていますか？

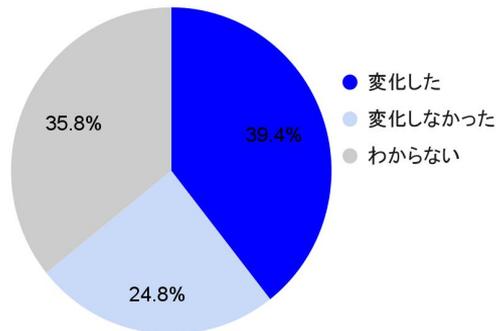
- 事後アンケートでMylogを使うことで自己理解が「深まった」「とても深まった」と回答した生徒が7.7%であった。
- 一方で、Mylogの結果は、現在のあなたの勉強や生活に役立っていますか？という質問に対し、「役立っている」「とても役立っている」と回答した生徒は35.5%に留まった。
- このことから、自己理解は深まったもののMylogの解釈を自己調整にまで繋げられていない現状があるのではないかと考えられる。

4. 成果報告(自己理解の深まりについて:生徒)

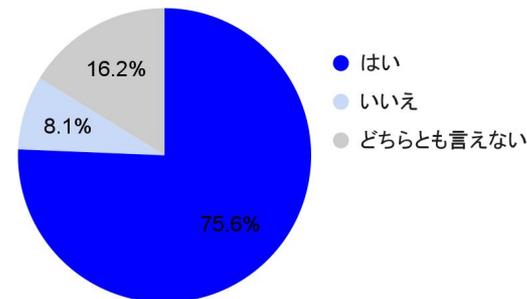
『自分学』を行うことによって、興味関心、好奇心などへの意識が高まりましたか？



『自分学』を受けたことで、自分はこうなんだというイメージが変化しましたか？



今後も『自分学』のようなプログラムで、自己理解を深めていきたいと思いませんか？



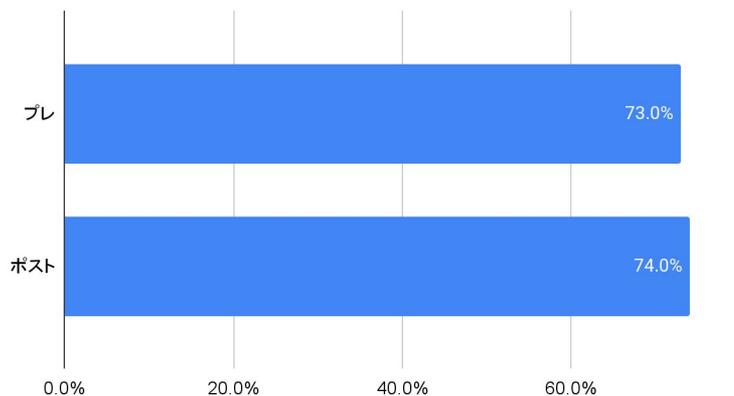
- 「『自分学』を行うことによって、興味関心、好奇心などへの意識が高まりましたか？」という質問に対し、「高まった」「やや高まった」と回答した生徒が**83.4%**であった。このことから、外発的動機付けから内発的動機付けによる学びへと意識が変化している可能性が示唆される。
- 「『自分学』を受けたことで、自分はこうなんだというイメージが変化しましたか？」という質問に対し、「変化した」と回答した生徒**39.4%**で、「変化しなかった」と答えた24.8%より14.6ポイント多かった。自己理解が進むことによって自己イメージも変化していると考えられる。
- 「今後も『自分学』のようなプログラムで自己理解を深めていきたいと思いませんか？」という質問に対し、「はい」と答えた生徒**75.6%**であった。多くの生徒が自己理解を深めていくことに対して、前向きな姿勢だということが示唆された。

4. 成果報告(自己肯定感の高まりについて:生徒)

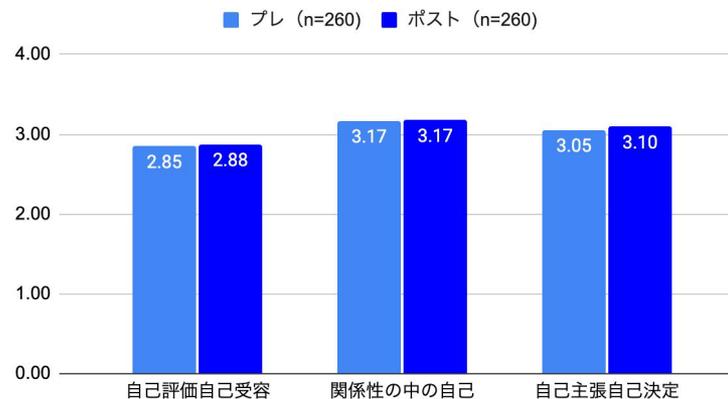
成果指標: 自己肯定感

73%→74% 変化率 **1.37%**

達成



自己肯定感の事前事後比較(あてはまる・ややあてはまるの人数の平均の比較)



自尊感情・自己肯定感の分類と変化

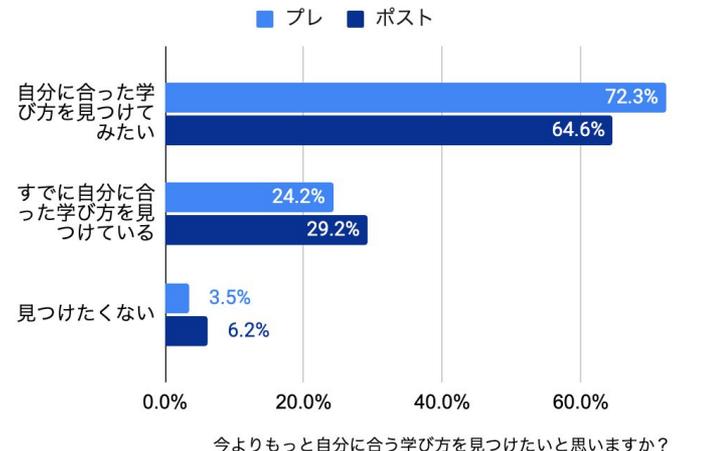
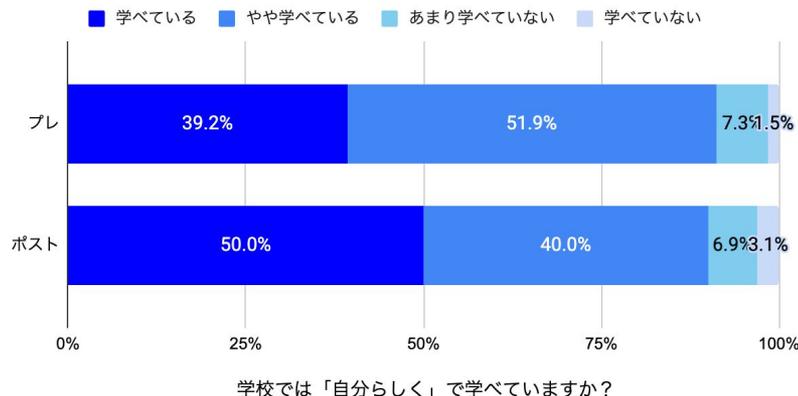
- 自尊感情尺度(東京都版)を使用し、自尊感情・自己肯定感を前後比較した結果**プレ=73%→ポスト=74%**と僅かに上昇した。(変化率1.37%)
- 「自己評価・自己受容」「関係性の中の自己」「自己主張・自己決定」とい3つの観点で比較すると、「自己評価・自己受容」「自己主張・自己決定」が上昇した。自分学により自己理解が進み、自分を受容できるようになったり、「学びの自己調整」という観点が芽生えたことで伸びたのではないかと考えられる。

4. 成果報告(主体的な学びへの学習観の変化:生徒)

成果指標: 主体的学習機会

91.2%→90.0% 変化率-1%

概ね達成



- 「学校では『自分らしく』学んでいますか？」という質問に対し、「学んでいる」と答えた生徒**39.2%から50.0%に上昇**した。一方で、「やや学んでいる」と答えた生徒が**51.9%から40.0%に減少**したことで、「学んでいる」「やや学んでいる」の合計が**91.2%から90.0%に減少**した。
- 「今よりもっと自分に合う学び方を見つけたいと思いますか？」という質問に対し、「見つけてみたい」と答えた生徒**72.3%から64.6%に減少**し、「すでに見つけている」と答えた生徒は**24.2%から29.2%に上昇**した。自分学を通して、自分に合う学び方を見つけた生徒がいることが示唆された。

4. 成果報告(主体的な学びへの学習観の変化:生徒)

「学校では自分らしく学んでいますか?」に対する回答と変化の有無ごとの自由記述抜粋

変化有の生徒

	プレ	→	ポスト
	学校では自分らしく学べていない		学校では自分らしく学べている
生徒A	あまり学校の勉強に興味をもてないから		自分の好きな授業スタイルだから
生徒B	自分から何かやろうとしていないのでこうおもいました		自分がどのようにしたらわかりやすく理解できるか考えているから
生徒C	どんな学びが自分らしいのかがいまいちわからない		ノートのとりかたを前より見やすく工夫したり、板書だけじゃなくなった

学びに対して受動的であった状態から、自己理解に基づく学び方への意識を深めることで、自ら学びを調整することにチャレンジしている様子が見られた。

変化無しの生徒

	プレ	→	ポスト
	学校では自分らしく学べていない		学校では自分らしく学べていない
生徒D	自分の意見を積極的に言えていないから。		家に比べて周りに流されている感じがあるから。
生徒E	人に頼っているところがある		勉強するのがめんどくさく感じる
生徒F	頭にくる 覚えにくい 勉強しづらい		強制労働みたいな感じが
生徒G	自主的に勉強をしようと思わないから		追いつけないから

勉強のペース、内容、方法の合わなさが読み取れる。約半数の生徒が、このような理由から「学校では自分らしく学べない」と感じていると思われる。

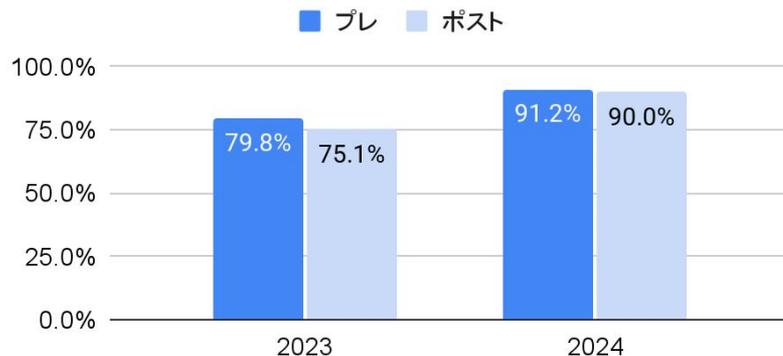
4. 成果報告(Mylogの効果について:経年比較)

成果指標: Mylog効果度(経年比較)

昨年: -4.70% 今年: -1.20% 変化率74.47%

達成

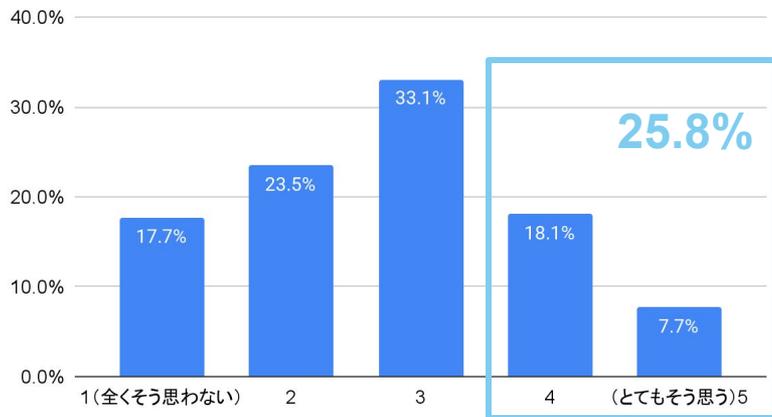
2023中1と2024中1の比較(中1に視点を固定)



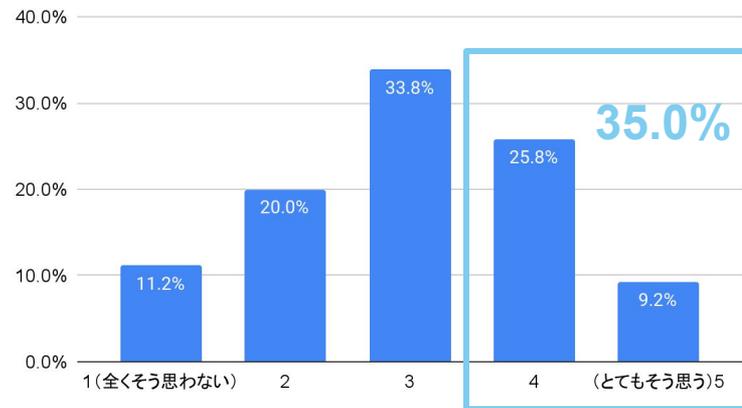
自分らしく学んだり、過ごしたりできていますか？

- Mylogの効果を測定するために、「自分らしく学んだり過ごしたりできていますか？」という質問に対してMylogがなかった時の2023年度の中1の実践のデータと、Mylogを使った時に2024年度の中1の実践データを比較した。それぞれ「学べている、やや学べている」と回答した生徒の割合を算出した。
- いずれの年度も、プレと比較してポストが減少傾向にあったが、その減少率が2024年度は少なくなっており、これはMylogの効果として捉えている。

4. 成果報告(昨年度の実証の1年後の効果について:2年生)



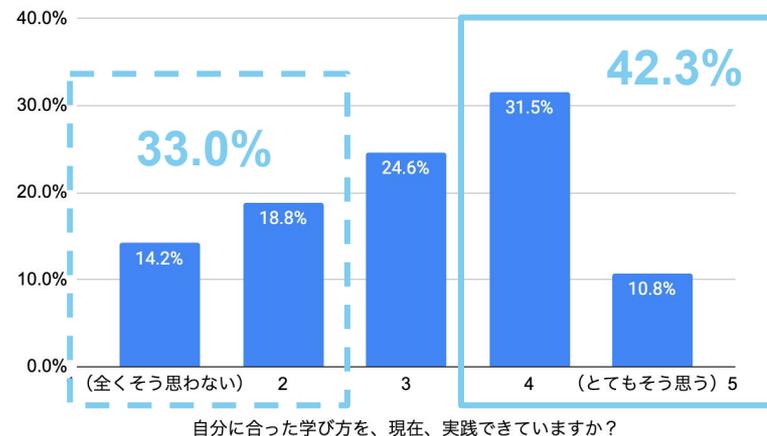
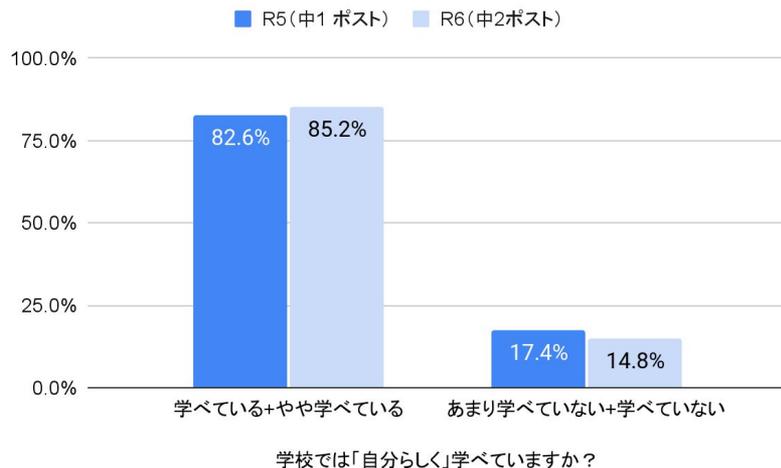
昨年受けた自分学を、2年生になってから思い出すことはありますか？



昨年の自分学が、2年生の現在の自己理解のために役立っていると思いますか？

- 「昨年受けた自分学を、2年生になってから思い出すことはありますか？」という質問に対し、「そう思う」「とてもそう思う」と答えた生徒は25.8%、「昨年の自分学が、2年生の現在の自己理解のために役立っていると思いますか？」という質問に対し、「そう思う」「とてもそう思う」と答えた生徒が35.0%であった。
- このことから、アセスメントや自分学の効果は一定程度保たれると示唆された。

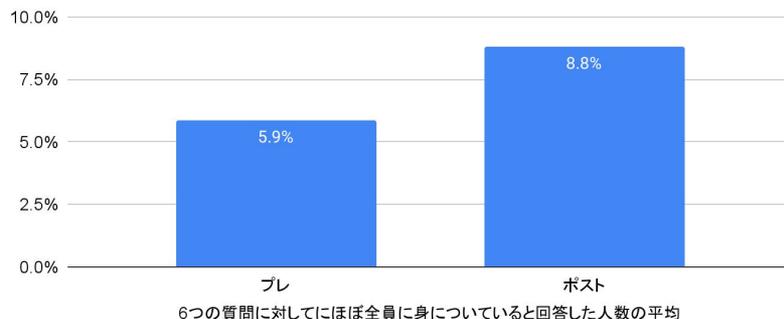
4. 成果報告(昨年度の実証の1年後の効果について:2年生)



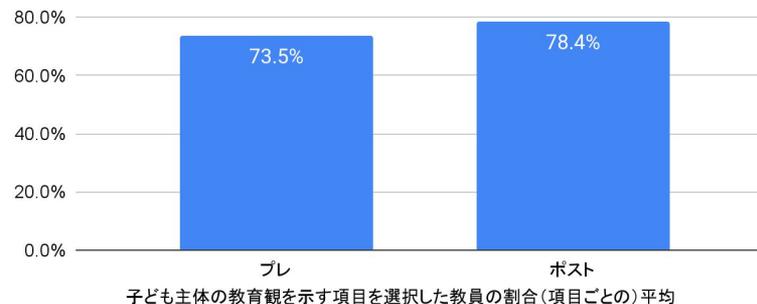
- 昨年度、「自分学」を受講した中学2年生について、「自分学」の効果がどの様に影響しているかを分析した。「学校では「自分らしく」学んでいますか？」という項目に対して、昨年の自分学を受講した直後の様子と今年の様子を比較した。
- 自分学直後の様子では、82.6%の生徒が学んでいると回答したことに対し、1年後は85.2%の生徒が学んでいると回答し、2.6%上昇した。
- 自分に合った学びを現在実践できているかという質問に対しても5段階中4と5を選択した生徒は42.3%であった。
- 「自分学」を受けて、自分らしく学ぶということに気付き、時間をかけて少しずつ実現されてきている様子が示唆された。

4. 成果報告(指導観の変化について:教員)

成果指標:生徒への評価の多軸化	5.9%→8.8% 変化率 49%	達成
成果指標:教員の意識変化度	73.5%→78.4% 変化率 7%	達成



受け持ちの生徒に関して次に表す「力」がどれくらい身についていると思いますか？
「各教科の基礎的・基本的な知識・技能」「新しい発想やアイデアを生み出す力」「人と協力しながら、ものごとを進める力」「自ら学び続ける力」
「自ら意思決定する力」「多様な選択肢の中から学習環境を選び取る力」

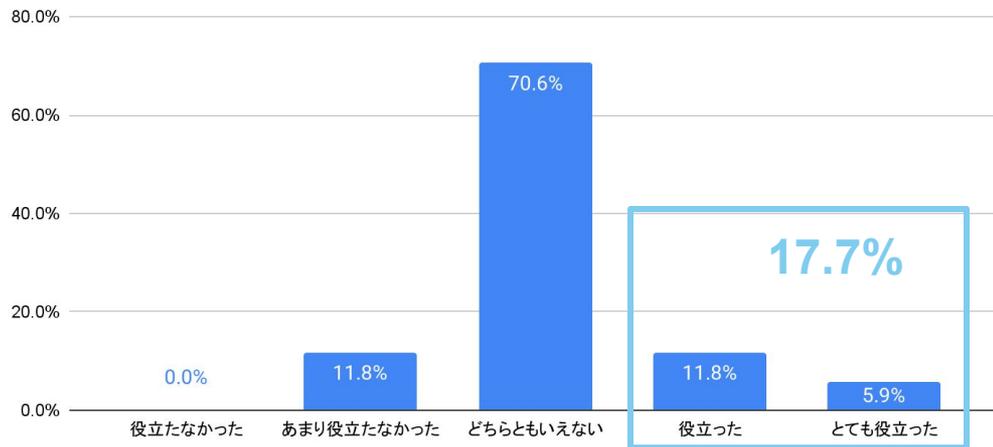


教員の指導観アンケート(ベネッセ [Sido KOKO 01.pdf \(benesse.jp\)](#)より抜粋
自主性・可能性支援か訓練重視かについての質問(以下に例示回答。
例)自発的に学習する意欲や習慣を身に付けさせること orたとえ強制してでもとにかく学習させること

- 「生徒の状況について」の6項目で、教員がさまざまな力が生徒に身についていると感じる方向12.9ポイント上昇した。(変化率49%)
- 「教員の指導観について」の6項目で子ども主体の教育観を示す教員の割合が73.5%から78.4%に上昇した(変化率7%)
- このことから、本実証が教員の意識の変化を促したことが示唆された。

4. 成果報告 (AOS Dashboardの効果について: 教員)

成果指標: DashBoard活用度	17.7%	未達成
--------------------	-------	-----



Dashboardは生徒の多様な個才を把握することに役立ちましたか？

【役に立たと回答した教員のコメント】

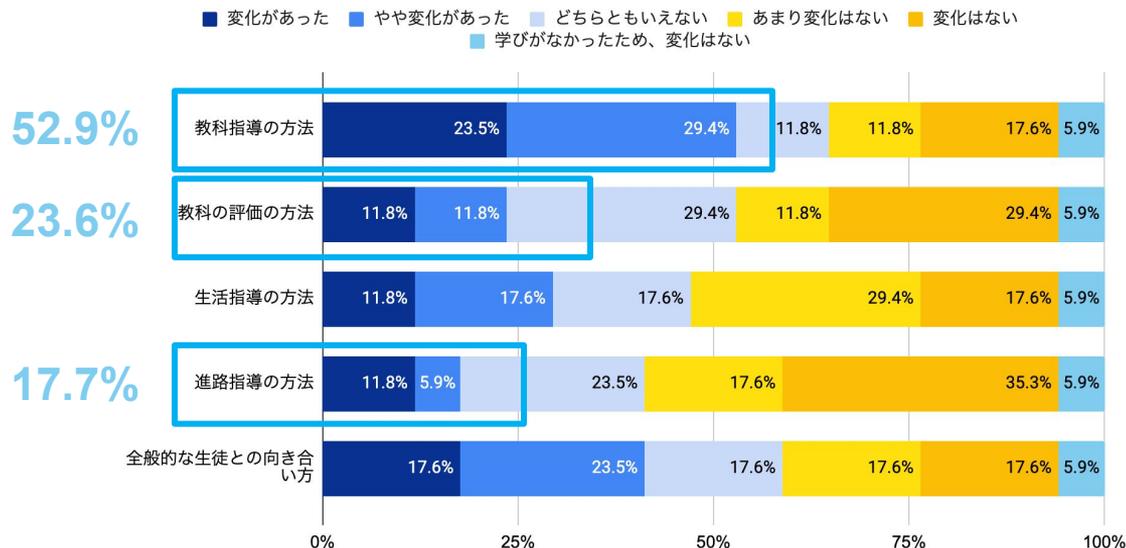
- 集団としての傾向が見れるところ。比較できるところ。
- 自分が抱いている印象と結果が一致する部分もありクラスの把握に役立った。複数回やるとその変化が見れるのも役立ちました

【役に立たなかった・どちらとも言えないと回答した教員のコメント】

- よいものではあるが、クラス間で比較するダッシュボードは、使いこなすことが難しいと感じた。
- うまく活用ができなかった
- 自分があまり有効活用しきれていなかったから。

- 「Dashboardは生徒の多様な個才を把握することに役立ちましたか？」という質問に対し、「役立った」「とても役立った」と回答した教員は17.7%に留まった。
- 上記の自由記述コメントから読み取れる通り、視覚化されるだけではそれをどう活かしていけば良いのかわからない、難しいと感じる教員が多かった。教員がDashboardの効果を感じるためには、図示されたことへの具体的な支援策を提示するようなサポート機能が必要なである可能性が示唆された。

4. 成果報告(本実証を通しての教員の変化:教員)



『自分学』を実施したことで、先生ご自身の指導や評価の方法などに変化はありましたか。

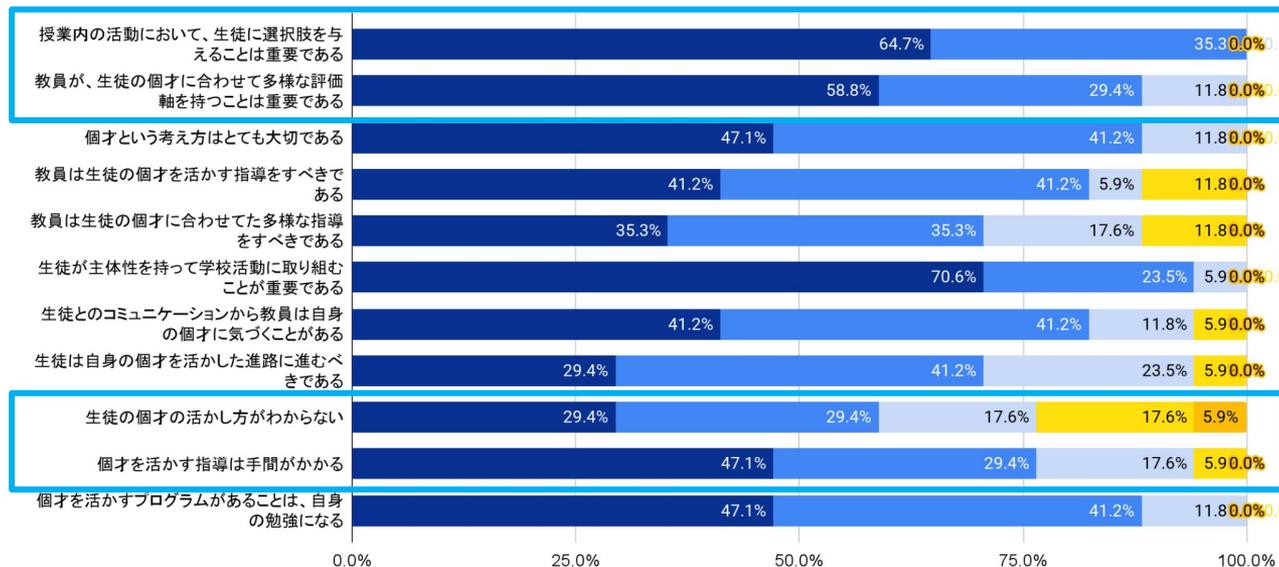
【指導や評価の変化に関する教員のコメント】

- いろいろな方法があると受け入れることができるようになった。
- 評価する際の基準を幅広くとらえるようになったから。
- 同じかわり方ではいけないと思い、少しではあるが生徒に合わせてアプローチを変えようと思っています。
- 様々な選択肢や伝え方の工夫をするようになった。

- 自分学を実施したことにより、「教科指導の方法」が変化したと答えた教員は2.9%であった。また、「教科の評価方法」に変化があったと答えた教員は23.6%、「進路指導の方法」に変化があったと答えた教員は7.7%であった。自分が受け持つ授業内での工夫はすぐに反映できるが、評価の方法や進路指導においては学校全体の方針、社会や地域とのコンセンサスが必要でもあるため、教員の力による変化を実感することが難しいのではないかと考えられる。

4. 成果報告(本実証を通しての教員の変化:教員)

■ そう思う ■ ややそう思う ■ どちらともいえない ■ あまりそう思わない ■ そう思わない



"以下の項目それぞれについて、どのように思うかお知らせください。"

【個才理解に対する教員のコメント】

- 個才がある前提で授業を行うことで、教えるときに気持ちが軽くなった。
- 日常生活における生徒の見とりとspaceQの結果の両方から生徒を捉えることで、指導の仕方に様々な工夫をするようになった。生徒自身が自分の特性を知ることができるので、指導の中で、それを活用するように伝えることができるようになった。
- 連絡事項は口頭ではなく、黒板を活用するなどした結果、聞き漏れが少なくなったような気がしています。

- 自自学実施後、「授業内の活動において、生徒に選択肢を与えることは重要である」と答えた教員は100%、「教員が生徒の個才に合わせて多様な評価軸を持つことは重要である」と答えた教員は82.2%であった。一方、「個才の活かし方がわからない」と答えた教員は8.8%、「個才を活かす指導は手間がかかる」と答えた教員は6.5%であった。
- 多様な評価軸を持ち生徒主体の学びを実現したいと考えながら、実際には難しいと感じている教員の姿が明らかになった。

4. 成果報告(まとめ)

実証による効果

①生徒の自己理解の深まり

Mylogを使うことで自分の得意なことや自分の考え方など、自己理解が深まった生徒が増加

②生徒の自己肯定感の向上

自己理解を深めたことによる自己肯定感の向上

③教員の指導観の変化

生徒主体の教育観を示す教員が増加 73.5%→78.4%

①教員の生徒理解の変化

生徒にさまざまな力が身につけると感じる教員が増加
→変化率49%

見えてきた課題

①Dashboardの活用

Dashboardが生徒理解に役立ったと回答した教員→17.7%

②主体的な学びへの学習観の転換

「学校で自分らしく学べている」と回答する生徒の減少



Dashboardに関する教員の意見

- 集団としての傾向が見れるところ。比較できるところ。
- よいものではあるが、クラス間で比較するダッシュボードは、使いこなすことが難しいと感じた。
- うまく活用ができなかった。



アセスメントと自分学の導入により、生徒は自己理解を深め自己肯定感が上昇し、教員は生徒理解を深め生徒主体の教育観へと意識が変化したことから、本実証を通して学習の個性化と指導の個別化に一定の効果があったと考えられる。一方で、Dashboardで読み取れる情報をうまく活用できないという教員の声の複数上がると共に、学校の環境が生徒にとって自分の学びを自己調整できる仕組みになっていないという根本的な課題が浮き彫りになった。

1

個別最適な学びから学びの土台としての ウェルビーイングへ

自己理解については一定の効果が見られるものの、それが自分らしい学び方に結びついていない状況がある。また、学校環境では学び方の多様性への配慮はあるものの、学力優先の価値観の中では自由に自分に合った学び方を試す機会が十分に確保することが難しく、自己調整による自己効力感が十分に育まれにくいと考えられる。

こうした背景を踏まえ、自己理解から学び方の環境調整に直接繋げる「学習の個性化」の以前に、学習のレディネスとして自分自身の状態を知って、学習に向かうための土台としての「ウェルビーイング」がどのような状態かを把握していくことに意識を向けることがより重要であると考える。**個別最適な学びの実現には学びの土台としてのウェルビーイングが必須**であり、今後はそのために本技術の活用を推進したい。

2

AIによるアセスメントの 活用支援策の提案

アセスメントの結果から自己理解・生徒理解を深めることについては一定の効果がある一方で、解釈が難しい、アセスメントを実生活で活かす方法がわからないという課題がある。

生徒に対して: アセスメント結果のAIによる文章フィードバックと具体的な活用アイデアを提案する仕組みを導入することで自己理解をさらに深め、自己探究の幅を広げることを目指していく。

教員に対して: アセスメントを通じた生徒理解は深まったものの、具体的な対応を教師自身で導き出したり、具体的な行動変容には結びつくことが難しいケースがあるため、教員の力量や経験に依存せず、AIによる対応策や授業アイデアの提案を通じて、支援方針を立てられる視点を養い、行動変容を促すことを目指す。

